

令和元年6月14日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03118

研究課題名(和文) 中世東地中海文化圏における文書編集の考察

研究課題名(英文) Mediterranean Intellectuals Editing of Byzantine Anthology

研究代表者

草生 久嗣 (KUSABU, HISATSUGU)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10614472

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ビザンツ世界での異端学についてのテキスト本文のち密な分析に基づき、同時代知識人異端学者の他者観は、歴史研究上の「異端視」と異なったものであることを明らかにした。多くの民族が共生する地中海世界において「パノプリア」のような異端学書を編纂することは、キリスト教異端者のリストアップする作業であるよりも、正統教会の神学者ジガベノスが「パノプリア」編纂において行ったように、異端というレッテルを用いつつ他者としてその人々を理解しようとする姿勢の表れとみるべきであろう。2013年に完了した博士論文研究を引継ぎつつも、検討対象を拡大し本研究期間中にその成果を発表している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東地中海世界にあっては、異端断罪は「他者にまつわる情報編集」の一つのありかたであり、信仰による狂信や教義論上の視野狭窄などではなく、異端のレッテル機能、異端学者(知識人)のレトリック、異端学書(参考書)の編集技術が構築したものであったといえる。これは、西洋の異端弾圧についてのイメージや理解の見直しを求めるものであった。

異端迫害という現象は、特定の少数者のイデオロギー支配による排斥行為にとどまるものではなく、およそ現代にもみられる被害者に対するレッテル貼り、そのレッテルを運用する教養人層、そのレッテルにまつわる情報を編纂する技術がそろったところでは、いかなる人的集団も異端者とされ得たのである。

研究成果の概要(英文)：A close textual investigation of the editing of heresiologies revealed the Byzantine intellectuals' view of some doctrinal and/or social outsiders, which differed from modern historians of "Medieval Heresy." Editing heresiology of the Panoplia in the Mediterranean World, filled with various "nations," was not merely a compilation of historical Christian heresies but, rather, an active conceptualization of contemporary groups labeled by Orthodox intellectuals, such as Euthymios Zigabenos.

The JSPS project (16K03118) covered my supplementary research of the dissertation project "Comnenian Orthodoxy" (Chicago, 2013) and was successfully finished in 2016. To help create a new edition of the Dogmatike Panoplia of Euthymios Zigabenos, the project produced preparatory publications for historical investigation of the Patarenes and the Paulicians, and philological research of the Dogmatike Panoplia (co-authored with Papulov).

研究分野：西洋中世史

キーワード：西洋中世史 ビザンツ史 地中海 編集 写本 キリスト教 異端 宗教問題

1. 研究開始当初の背景

(1) 西洋中世史上ビザンツ帝国の研究者にとって、研究の困難な障害となってきたのは残存史料の質・量双方での乏しさである。この史料的課題に取り組むことは、ビザンツ帝国研究全般において求められる作業課題であるといえる。確かに前近代東地中海世界の知的伝統ののちとり、いわゆる「文芸作品」・「叙述史料」は君主鑑・史書・奉賛文・詩歌・聖人伝・寓話や小説に至るまで取りそろっているものの、西欧中世の地域史研究を支えたような「文書資料」(会計簿や徴税台帳、実数記載のある記録書面に代表される)は絶対数において乏しい。さらに文芸作品含む叙述史料は、尊重された伝統主義によってスタイルが固定化、歴史的展開の乏しい資料とみなされている。そのため、ビザンツ人自身の知的活動の諸相を明らかにするためには、残された史料それ自体を分析対象とする方法論が提案される必要があった。

(2) 2013年以前の研究からは、本研究はビザンツ人のリテラシーについて、その情報編集力について着目することで、西洋中世学上の重要テーマとして知られる中世キリスト教異端論に対して新機軸となる可能性が見て取れた。同時代人の編集を伝統主義、すなわち既存のテキストを過度に重視し、その文言に拘泥する姿勢とみるのではなく、豊かなアイコン文化同様、古典の忠実な複製・再現・再編纂の中に、同時代が明示的でなく描き出されているととらえることで先の史料課題を超えた形での成果が期待された。

2. 研究の目的

本研究課題に取り掛かるまでに、研究代表者はアンソロジーという既存テキストの複製を目的とするジャンルにおいてすら、ビザンツ人編集者が原著者の言説を利用しつつ、独自に言説を「編集」し、さらに写本制作者(写字生)たちもレイアウト他において主体的にデザイン変更を施したという事実を確認している。写本制作は、単に筆写人(scribes)と、編集者(editor)、原著者(author)による単なる知の複製のための分業でなく、それぞれが写本依頼主あるいは知的サークルの要請に合わせて、作品を再構成する機会であると思われた。本研究ではそれを具体的に把握するために、原テキストに対する「悪意のない・恣意的でない」改変や要約のあり方にも、歴史的な意義や問題の諸相をみてとることも可能になると仮説、東方ビザンツと言う地域の、異端論駁という一見目的が特殊なアンソロジー・ジャンルの写本作成からも、同時代人の主体的な知的関与の相を見て取ろうとした。

3. 研究の方法

(1) 12世紀に至るキリスト教地中海世界では、神学論争は術学の無為ではなく、支配の正統性を争奪しあう政治的な言説空間であり、同時代コンスタンティノーブルにおいてこの論争の書はその実用性を認められて繰り返し作成され、よく利用されていた。本研究は、具体的な材料としてビザンツ帝国12世紀の異端論駁用の神学命題アンソロジーである「パノプリア」を取り上げた。「パノプリア」とは、その語義「完全防護・総合武器庫(英語 Panoply)」が示すように、神学論争に際して議論の正統性・有効性を高めるために、諸聖典から引用文言をまとめあげたものである。その代表格のエウティミオス・ジガベノスによる『ドグマティケー・パノプリア』は、20数名の原著者の様々な著作から切り出した数百点のテキスト断片で構成される。

(2) ジガベノス自身は、採録テキスト本体の原著者ではなく、編集者の立場にある。ところが彼が採録したテキスト断片は、それぞれ同時代において正文批判を経たような「正確な」テキストではなく、また後代の写字生もおよそテキストの原典には関心を示さない。そうしたアンソロジー作成では、人々の間に流通したまま写本作成者の手元にあった既存写本が任意に用いられ、編者ジガベノスおよび後代の写字生が関与して、テキストへの段落変更・加筆・改変を行うに至っている。それを是としていたビザンツ人は、原著者の権威 authority を尊重する一方で、後代の編集者が連携して、読者の需要に応じた対応を取っていたことが推察される。この仮説を実証し、これを理論として提示するには、少なくともジガベノスのパノプリア以外にも含めたジャンルの全体像を示しつつ、一つ一つの異端現象(ボゴミール派問題、マッサリアノイ派問題、パウリキアノイ派問題など)を同時代文化の中に位置づける必要があった。

(3) そうした調査を経てパノプリアはとりわけその編纂過程(成立時期)を歴史的に再構成すること、編者が手元においていたであろう元写本(ライブラリー)について再構成を目指した研究作業が行われるべきであると考えられた。

(4) そこで本研究は、(1)資料調査・歴史研究(2)資料データ分析、(3)経過および成果の発表といった性質の異なる作業を同時進行で進めることになる。すなわちビザンツ帝国における書物文化および写本にまつわる研究動向を、資料調査と学会活動によって把握し、関連の大小写本を合計70点収集しつつ、電子テキスト化して校訂のための本文批判を行うこと、テキストを構成する被引用テキスト断片の由来や編集手法をデータ化し、そこに理論的な特徴を見

出す。またその成果は適切な方法でプレゼンテーションし、著者ジガベノスおよびその他ビザンツ文人たちの書籍文化活動の実態について明らかにする。

4. 研究成果

(1)本研究は、部分的な資料分析データに基づき理論的仮説を国際学会の場にて発表、またそれを論証する個別検証例を活字出版し、それへのフィードバックを反映させて次の分析にとりかかるというサイクルを基本としていた。初年度では、パノプリアを含むいわゆる「異端論駁書」および「異端学書」の認知を高めるべく、本研究課題の意義について国際学界に問うた形である。「国際査読誌である Asian Review of World Histories への掲載を果たしたのち、国際シンポジウム(学会発表)で英語報告、同8月セルビア共和国ベオグラード大学で開催された第23回国際ビザンツ学会での英語報告を行った(学会発表)。このベオグラード学会にて、当初予定していたセルビア南部・ボスニアヘルツェゴビナでの資料・史跡調査の計画について研究者と懇談、その周辺環境の悪化を指摘され、その観光以上の有効性について指摘を受けたため次年度以降での活動を実地調査から資料精査へと変更するに至っている。ただし、その変更を反映し、ボスニア教会についての文献調査に取り組んだ成果は2017年2月に行った国際シンポジウム(学会発表)で発表した。

(2)第二年度において、主要・デジタルマイクロフィルム資料の収集を行い分析がすすめられている。研究成果のプレゼンテーションの場として、『東方キリスト教諸教会 研究案内と基礎データ』にビザンツ総主教座研究をめぐる歴史学的課題について発表し、そこで異端学研究的意義を示している(図書)。また教科書副読本に位置付けられる『詳説世界史研究』に、ビザンツ世界にまつわる新稿を現在の研究動向を踏まえて執筆した(その他)。また、合同生活圏研究会(ビザンツ研究連絡会)の月例会を維持して、日本ビザンツ学会および西洋中世学会そのほかでの研究活動を活性化させている。

(3)最終年度は、研究課題にまつわるテーマについて、米国で開催されている国際学会(Byzantine Studies Conference in North America)での発表権を得て、英語報告を行い(学会発表)英文共著書“Radical Traditionalism”への論考寄稿(図書)を行った。また国内全国誌である『西洋中世研究』への論文発表を果たしている(雑誌論文)。これらは異端パウリキアノイ派についての文献的考察の成果であり、従来までその二元論的イデオロギーの特徴において取りざたされていた同異端集団について、パノプリア他異端論駁史料群を読み比べ、比較検討することから、中世ビザンツ的民族集団としての中立な評価がふさわしいことを論じている。これは異端問題を教義論または教会政治論としてとらえることの限界を指摘し、広く民族誌研究に「異端者」というレッテルが有効であることを示している。

(4)特に国際査読専門誌 *Revue d'Histoire des Textes* への論文掲載(雑誌論文)について、これは文献学研究の小稿ではあるものの本研究が進めてきた活動の一環が、博士論文後に改めて周知されたものといえ、成果として重視しておきたい。本研究が明らかにしたのは、いまだ明確に定説定まっていなかったパノプリアの発行年度について、文献学者・写本学者のゲオルギ・パプロフ博士(パーミンガム大学特任研究員)とともに、これまでのデータ解析の一環から仮説(1112年以降)を示したものである。従来パノプリアの刊行年度については、1099年頃に生じたとされる異端ボゴミール派審判の年代(諸説あり)をもとに、同時代叙述史料(アンナ・コムネナ『アレクシオス1世伝』など)をもとに類推されるにとどまっていたが、パプロフは文献学者として重要写本欄外にしたためられた編者ジガベノスの文言を発見、また写本装飾の様式分析からの年代測定をすすめていた。本研究者は従来看過されていたパノプリアの章節とくに「ラテン人反駁章」の完成年代についての文献学的考察をすすめており、両者が一致して皇帝アレクシオスとローマカトリック使節ペトルス・クリュソラノスとの会談(1112年)以降の成立を論じたものである。

(5)こうした成果とそれに対するそれぞれの段階で各国から受けたレスポンスにより、将来的課題でもあるところの新校訂本の上梓計画に見直しを強いることとなった。本研究遂行のそれぞれの機会、インタビューを行って写本学・ビザンツ学専門集団からのアドバイスを得られたことで、そうした総合成果発表への調査費・作業コスト・見直しを見通せるようになり、今後国際的連携も視野に入れつつ取り組むべき将来的課題をも残した。とくに将来的には新校訂版の作成が期待され、本研究にあってもその部分発表を計画していたが、国際学会での専門家による指摘のとおり、その拙速な新校訂などの出版には注意を要し、むしろこの新校訂版の準備のための総合研究をさらに展開することが重要であろう。

(6)以上の作業過程を経て得られた本研究の理論的成果にも触れておく。本研究の史学上の意義は、異端問題分析の視角に新しい方法を取り入れて具体的な成果をもたらしたことにある。西洋中世(そしておそらくそれにとどまらない地域・時代)での異端問題の本質は、偏狭な信仰心や排他的な正統意識といった観念的なものにとどまらず、キリスト教理念とは離れた形で

の政治闘争・行政措置などの極めて社会的なものも内包している。これらのことを本研究は、「異端のレットル」の機能(神学的要素)そのレットルを操作する同時代の社会(社会的要素)に加え、そうしたレットルの操作者としてあった同時代知識人たちの情報編集力(情報技術的要素)を指摘することによって明らかにしている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

Georgi Parpulov, Hisatsugu Kusabu, The Publication Date of Euthymius Zigabenus' s Dogmatic Panoply, *Revue d'Histoire des Textes*, 査読有, n.s. 14, 2019, 63-67

草生久嗣、党派活動(ハイレス)としてのビザンツ異端論 - パウリキアノイを見る眼、西洋中世研究、査読無、10号、2018年、10 - 24

Hisatsugu Kusabu, Heresiological Labeling in Ecumenical Networking from the Ninth to Thirteenth Centuries : The Byzantine Oikoumene Reconsidered, *Asian Review of World Histories*, 査読有, 4 (2), 2016,207-229,DOI: 10.12773/arwh.2016.4.2.207

[学会発表](計5件)

Hisatsugu Kusabu, Intercultural Approach to the De Ceremoniis - A Preliminary project report, The Forty-Fourth Byzantine Study Conference at San Antonio TX, 2018

Hisatsugu Kusabu, The Byzantine Manichee: Revisited, Workshop Byzantine Religious Controversy Revisited at Osaka City University, 2017

Hisatsugu Kusabu, "Medieval Heretics" in the East: A Heresiological Label for Bosnian Bogomils/Patarens in the Thirteenth Century, International Symposium: Medieval Papacy, Governance, Communication, Cultural Exchange at Rikkyo University, 2017.

Hisatsugu Kusabu, Byzantine Editors and Publishers: Texts, Works, and Reading, The Twenty-Third International Congress of Byzantine Studies at Belgrade University, Republic of Serbia, 2016.

Hisatsugu Kusabu, The Bogomil Narration and Heresiologists, Workshop with Prof. Holmes: Decoding the Historical Sources on Byzantium at Rikkyo University, 2016.

[図書](計2件)

Hisatsugu Kusabu et ali., Lexington Books, Radical Traditionalism, The Influence of Walter Kaegi in Late Antique, Byzantine, and Medieval Studies, edited by David OIster and Christian Raffengerger, 2019,181-196

草生久嗣 他、明石書店、『東方キリスト教諸教会 研究案内と基礎データ』三代川寛子編、2017年、393-400

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

(1) 大場茂明・大黒俊二・草生久嗣編、清文堂出版、文化接触のコンテキストとコンフリクト - 環境・生活圏・都市 (大阪市立大学文学研究科叢書 10)、2018 年、序文

(2) 草生久嗣、イスタンブルのテクフル・サライ、地中海学月報、査読無、第 407 号、2018 年、6-6 頁

(3) 草生久嗣、山川出版社、詳説世界史研究：木村靖二・岸本美緒他編、2017 年、165-171 頁

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。